

弥生時代からの遺跡を生かした 地域との公園づくり ～高蔵公園の再整備を通して～

大澤由希¹・鳥居世菜²

¹名古屋市緑政土木局 緑地部緑地事業課（〒460-8508 名古屋市中区三の丸3-1-1）

²名古屋市緑政土木局 都市農業課（〒460-8508 名古屋市中区三の丸3-1-1）

本市では国土交通省の都市公園補助事業である「都市公園ストック再編事業」を活用して、公園再整備に取り組んでいる。本稿では、同補助事業により、弥生時代からの歴史的資産を残す名古屋市熱田区の高蔵公園において行った、地域住民とのワークショップによる公園づくりの過程や公園利用の広がりを紹介する。

キーワード：都市公園，再整備，協働，歴史的資産

1. はじめに

名古屋市熱田区高蔵一帯は、名古屋の副都心である金山の南に位置し、弥生時代からの環濠集落（貝塚）等の遺構が分布し、周辺には断夫山古墳や白鳥古墳といったこの地域を代表する古墳、熱田神宮や七里の渡しなどの史跡が数多くあり、古き時代より人々が暮らし、文化が芽生えていた地域である（写真-1）。

高蔵公園（面積1.66ha、近隣公園）は周辺の開発が進む中、まとまった緑を有し、園内には古墳や遺構などを残すなど高蔵遺跡を今に伝える貴重な場所である。また、熱田神宮とほぼ同じ創祀とされる高座結御子神社を三方から取り囲む立地で、神社と公園の樹木がひとつの鎮守の杜を呈し、地域にとって心の拠り所として大切にされている。

しかしながら、敷地が県営・市営区域に二分され、管理者別に維持管理の違いが生じるという特異な状況であったことや、施設の老朽化、樹木が繁茂し薄暗いなど、高蔵公園に対する住民の利用や評価は芳しくなかった。

そのため、平成28年4月に県営区域が市へ管理移管されたことを契機に、国の都市公園ストック再編事業を活用し、公園再整備に取り組むこととなった。



写真-1 高蔵公園周辺の航空写真

2. 再整備事業の概要

(1) 高蔵遺跡と高蔵公園の概要

高蔵遺跡は、今から1,800年以上前の弥生時代を代表する遺跡で熱田台地の東の縁辺部に位置している。明治40年に行われた名古屋市中心部を南部に貫く大津通の拡幅工事で多くの土器が出土したことをきっかけに、南北700m、東西500mの範囲にかけて弥生時代を中心に古墳時代から鎌倉時代までの遺構、遺物が多数見つかっている。

明治41年に調査報告を行った鍵谷徳三郎氏の記録には、高座結御子神社を取り囲むように7つの古墳があったと

あり、現在でもわずかな土の高まりを見ることができる(図-1)。昭和29年には名古屋大学による高蔵1号墳の発掘調査が行われ、古墳の規模や石室の形が明らかになったほか、中からは5人分の人骨や装飾品、鉄の刀、釣針や土器が出土した。

また、高蔵遺跡の代表的な出土品としては、独特な形と赤色顔料が美しい弥生時代後期の「パレス式土器の壺(東京国立博物館所蔵)」(写真-2)が挙げられ、国の重要文化財に指定されている。

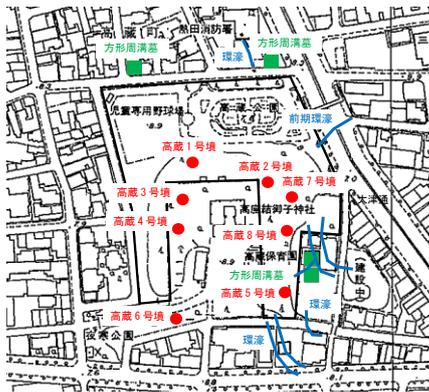


図-1 高蔵公園付近の遺構位置図



写真-2 パレス式土器の壺(園内解説板より)

公園の歴史としては、北半分(0.98ha)が県営公園として昭和14年に整備(皇紀2600年記念熱田神宮宮域整備事業の一環、昭和19年に供用開始)、南半分(0.68ha)が市営公園として整備(戦災復興土地区画整理事業、昭和24年に供用開始)され、県営・市営が並立する形で共用されてきた(図-2)。

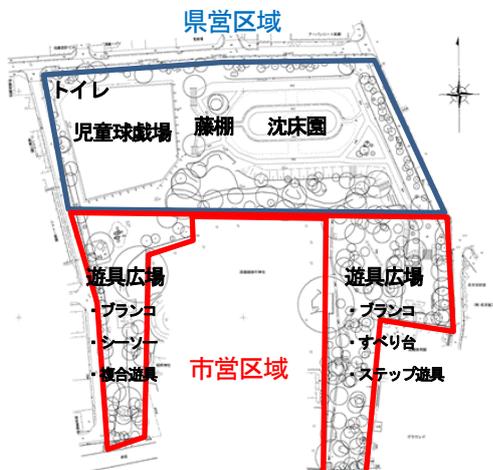


図-2 再整備前の高蔵公園平面図

(2) 再整備までの経緯と公園が持つ課題

高蔵公園の県営区域は平成25年度の愛知県の「行政改革の推進に向けた外部有識者による公開ヒアリング」を経て廃止・民営化・地元移管等の検討が進められ、平成26年度に県から市に土地の無償貸付、施設の無償譲渡の提案が出された。「身近な公園は県よりも基礎的自治体である市で一体的に管理されるべき」との主張を受け協議が進み、平成28年4月1日付けで無償貸付による市への管理移管、施設の一部無償譲渡という内容で合意した。

また、平成27年11月の名古屋市会(本会議)において、熱田区選出議員より「高蔵公園の再整備について」質問があり、「一体的な公園として住民参加を得ながら地域の特性を生かした公園づくりを進めたい」と答えている。

移管に際した地元ヒアリングでは「暫定的な仮整備のままなのか?砂利の舗装では小さな子どもが転びやすいし石を投げて危ない」「雑草が多く、施設も古い。県管理の時よりも良い公園になるように」など、厳しい声をいただいた。

そして、再整備を始めた平成28年度当初の課題として、神社の杜と一体的に特別緑地保全地区に指定されていた公園南東部の樹林地について、見通しの悪さや老木化対策が挙げられた。また施設については、沈床園や円形の藤棚、花壇、児童球戯場、トイレ、ブランコ、すべり台等の遊具などいずれも老朽化による損傷・汚損が進み、利用する人は少なかった。

(3) 事業手法の決定

事業化を模索する中で、課題は事業費の確保と利用ニーズの反映であった。高蔵公園の状況から再整備を試算すると、排水・電気等の基盤整備や遊具等の施設整備、便所建替えなどを含め、1.5~2億円の面的整備費が見込まれた。また、地域の利用ニーズの反映が公園再生の鍵となるため、地域との対話をどのように行うのか検討を要した。

事業費の確保については、国の都市公園補助事業である「都市公園ストック再編事業」を活用した。この事業は、公園利用ニーズの変化に対応して身近な公園の機能再編(再整備・再配置)を目的とするものである。全体の事業計画は、既存の公園利用への配慮と年度毎の事業費の平準化を図るため、設計1か年と工事3か年の計4か年で進めることとした。

また、地域との対話については、「みんなのアイデア公園」づくりの手法(計画段階からの住民参加のワークショップ形式)を活用して意見・アイデアの反映を図ることとした。

3. 地域との計画づくり

計画づくりのワークショップとして、平成28年度に

「高蔵公園再整備計画づくり検討会」（計5回）を開催した。参加者は学区区政協力委員長をはじめ、地元高蔵町を中心に公園周辺の4町内会長（高蔵学区・旗屋学区）、高蔵町子供会会長、地元野球チーム代表や地域の歴史愛好家など高蔵公園と関わりのある方、また、熱田区選出の市議2名も参加され、各回20～30名程度で検討を行った。

(1) 第1回「公園の魅力を再発見」（7/13）

地域の皆さんの公園に対する思いや利用の仕方を把握するため「①普段の公園利用」「②10年後、30年後の公園の姿」「③良い（残したい）ところと改善したいところ」を各自付箋に書き、各7名程度の3班で話し合った。このうち②についての意見を紹介すると「子どもたちに歴史を語れる公園」「子育てがしやすく、若者たちがこの町に住みたくなるような公園」など地域づくりにもっと公園を生かしたら…という期待感が感じられた。

(2) 第2回「計画の目標（案）検討」（8/24）

第1回の意見をまとめて計画目標案を示し、これを基に再整備の方向性を話し合った。その結果、表-1のように、高蔵で古くより大切にされている歴史（遺跡）やみどり（高蔵の杜）が地域を結びつけ、どの世代も楽しめる公園を計画目標としてまとめることで合意した。

◇計画目標

「高蔵の歴史とみどりが みんなを 結び 楽しめる公園」

◇基本方針

基本方針	整備のキーポイント	あったらいいな	生かす・連携
①子ども達が安全に過ごせる空間にする	■走りまわれる原っぱ ■遊具を使ったあそび場 ■球戯のできる広場	・空生 ・かけっこコース ・球戯場(遊具付)	・地域のスポーツチーム(清掃等) ・公園愛護会
②地域が交流できる散策路や憩いの場をつくる	■散歩が楽しい散策路 ■地域行事や休憩で集える場 ■健康づくりの遊具コーナー	・周回遊路 ・バリアフリー遊路 ・ベンチ ・パーゴラ(藤棚)・広場	・地域行事 ・公園愛護会
③花や木々で四季をみんなで楽しむ	■子どもとつくる地域花壇 ■四季を感じる花木や並木 ■木もれ日あふれる高蔵の杜	・地域花壇 ・樹木吸引き ・桜 ・季節の樹木	・鎮守の森としての神社の植生 ・公園愛護会
④史跡を活かして歴史を伝える	■高蔵貝塚・高蔵古墳群を伝える場 ■史跡散策路「高蔵史の里コース」 ■子育ての守り神 高蔵精助子神社の伝説	・史跡表示杭 ・桜 ・史跡説明看板	・史跡散策マップ ・くるりんマップ ・小学生の課外学習
⑤災害時の活用に配慮する	■地震・火災時の一時避難場所 ■警戒宣言時における帰宅支障の案内場所 ■災害復旧活動ボランティアの受付拠点候補	・広場(オープンスペース) ・滞留空間 ・防災パーゴラ	・区役所 ・ボランティア

表-1 計画目標と基本方針

(3) 第3回 子ども達も参加！「中間報告会」（9/19）

通常メンバーに加えて学区内から広く参加者を募集し、高蔵町子供会の子ども達及び保護者、若い世代や地域防災のボランティアなど多様な住民参加があった。

第3回では計画目標を皆で決定し、これに沿った空間構成案2案について意見交換した（写真-3）。

そして、5グループの意見をまとめ、各案の良い所を取った折衷案でまとめ、「既存の地形を残したい」という意見を尊重し、「災害時に有効な広い空間」や「児童向け遊具広場」を設けることとなった。

世代毎のニーズも寄せられ、大人は「健康遊具」に関心をもち、子ども達からはロッククライムやアスレチック

遊具などの「大型遊具」や「斜面地を生かした遊具」で遊びたいとの意見が多く出た。さらに「古墳等の遺跡を実感できるようにしたい」など歴史的資産を活かした施設整備についても意見をいただいた。

参加者相互で、高蔵公園の資産や利活用について活発な意見交換がなされ、地域の公園を幅広い視点で見直す良い機会となった。



写真-3 子ども達による意見交換

(4) 第4回「基本プランの発表」（10/19）

第3回までの意見や検討内容を反映させた基本計画図（案）を提示し、図面上で基本プランの内容を確認するとともに、園路の線形や各施設の具体的なイメージ、照明、排水計画など細部の検討を進めた。また、トイレの洋式化、古墳の見せ方や、子ども達が公園づくりに携わるための工夫（花壇の絵タイル制作）、公園愛護会設立など再整備後の管理への地元参加に向けた意見交換も行った。

(5) 第5回「再整備プランのお披露目！」（12/7）

最終回では検討会の成果として、地域住民がイメージしやすいように整備予定の施設や植栽のイラスト等を添えた高蔵公園整備計画図（図-3）と、再整備の方向性を表で整理した計画目標と基本方針（表-1）を確認した。検討会の成果は、その後の実施設計作業に反映するとともに、町内回覧や学区のニュースレターなどで周知に努めた。



図-3 高蔵公園整備計画図

(6) 検討会のふりかえり

検討会をふりかえると、印象的だったのは回を重ねるごとに人々の相互理解が深まっていくことであった。初めは野球、歴史、散歩など個々の希望や関心に係る意見が多かったが、ワークショップを通じて次第に地域のみんなにとってどうだろうかという意見に変化していった。

身近な公園の再整備を一緒に考えることで、住民同士の結びつきが生まれ、地域交流の活性化につながる可能性を感じた。

4. 意見を生かした整備上の創意工夫

(1) 子ども達に魅力的な遊び場づくり

高蔵公園は、北東側にあった沈床園の名残で、北東が低く、南側の樹林地が少し高い地形となっている(図-2)。子ども達の遊びにおいて高低差を上り下りしながら走り回るとは魅力的であり、斜面を生かした遊び場のデザインを工夫した。第3回の検討会で子ども達の希望を確かめながら、樹林地と広場の斜面に「高低差のある地形を生かした遊具」「森を活かしたアスレチック」「クライム系とスライダー系で一連の流れができる遊具」を配置した「わんぱく子ども広場」が完成した(写真-4)。

また、北東広場には公園に隣接する高蔵保育園の幼児など小さな子ども達のかげっこ遊びを想定した「トラック園路」(写真-5)や砂場や汽車のパネル遊具等を低い柵で囲った「幼児コーナー」、樹林地には鳥獣保護区に指定された神社の柱で見られる野鳥をモチーフにした「小鳥スツール」を設けるなど、幼児が安心して楽しめる遊び場をデザインした。



写真-4 斜面を生かした遊具



写真-5 整備後のトラック園路

(2) ふれあいの「結びの広場」・絵タイル花壇の整備

かつては公園中央にシンボリックな円形藤棚があったが、地元から惜しまれつつ老朽化のため撤去された。また、地元の高蔵小学校の児童が学区内各地でチューリップを咲かせる「地域花壇」の一つも円形藤棚と共に撤去され、再設置の要望が小学校から寄せられていた。

検討会でも藤棚と花壇の復活を望む意見が出され、以前と同様の円形藤棚を公園全体が見渡せる中心部に置き「結びの広場」と名付け、休憩やおしゃべりが楽しめるふれあいの場を設けることとなった。

また花壇は、公園北側の日当たりが良くコミュニティ道路からも花が見える箇所に設置し、子ども達が公園整備に参加することで公園への親しみや愛着が増すよう、高蔵町子供会の協力を得て平成29年2月に花壇の絵タイル制作会を行った(子ども28名、保護者14名の計42名参加)(写真-6)。子ども達は自分でデザインした下絵にタイルを貼り付け、楽しみながら作業を進めた。花壇に絵タイルが張られると、公園がより明るい印象になり、保護者からは「子ども達にとって良い思い出となりました」と嬉しい言葉をいただいた。



写真-6 絵タイル花壇とその制作状況

(3) 埋蔵文化財調査と遺跡の活用

埋蔵文化財を有する公園のため整備工事に先立ち、教育委員会文化財保護室の学芸員による試掘調査及び発掘調査を進めた。その結果、古墳や遺構の位置・規模等が明らかになったほか、地表面のわずかな高まりを手掛かりに試掘した箇所からは、古墳内石室の石積み新たに確認され、新規発見の古墳(7号墳・8号墳)として追加の遺跡となった。

そして、遺跡を公園の魅力としてどう生かすのか、具体的な古墳の見せ方については学芸員と何度も調整を行い、できるだけ史実に基づいたものを伝えるため、試掘調査で記録した座標を用いて、地表面で平面的に古墳の規模や形状を表現することとした。1号墳(写真-7)では、円墳の形状や石室の位置に合わせて鉄平石や舗装を敷き、7号墳・8号墳は園内にあった旧市電の敷石を周溝の位置に合わせ、見せ方を工夫した。さらに、7号墳(写真-8)においては学芸員のアイデアを生かして、石室の周りを盛土で覆うデザインとして古墳をより実感しやすいようにした。

そして、古墳の近くには遺跡の概要を記した解説板を設置し、遺跡を学べる機能を持たせた。



写真-7 1号墳の規模や存在を表す舗装



写真-8 7号墳の舗装と解説板

(4) 擁壁の見直しと桜の世代交代

公園東側の生活道路沿いには公園造成時に作られたと推定される最大高さ3m程度の玉石積み擁壁があったが、近年上部からの落石が発生し維持管理上の課題となっていた。公園再整備を機会に抜本的な安全性の確保が必要と考え事前に現況調査をしたところ、構造は径250mm内外の玉石同士の隙間をモルタルで固定したのみであった。また、擁壁の上部近くには腐朽や枝折れの症状がある桜の老木（ソメイヨシノ、幹周約1.3～2m、高さ約10m）が5本あり、その根の一部が玉石を背後から押し、悪影響を及ぼしていると考えられた。

このため、寿命の長い桜（エドヒガン）に植え替える「桜の世代交代」を検討会で提案したが、桜に対する住民の愛着は強く、「擁壁の見直し（改修）は必要だが、桜は移植など何とか残せないか」との反応だった。桜に対する住民感情を尊重したいものの、寿命が短い桜とされるソメイヨシノの老木は損傷も見られることから移植後の活着は難しいと考えられた。状況を説明し何度も話し合いを重ねた結果、視認性を確保するため高さ1mの石積み擁壁を設置し、公園側には小段と法面で道路から広場まで10m程度の控えを作り、その上部に新しくエドヒガン桜のお花見広場をつくることで合意を得た。



写真-9 更新前と更新後の擁壁

(5) バリアフリー化の推進

みんなが楽しめる公園を目指し、福祉都市環境整備指針や都市公園の移動等円滑化整備ガイドラインに沿って出入口やトイレ、ベンチ、水飲み等施設のバリアフリー化を進めた。中でもトイレについては、従来あったトイレが和式であったことから、検討会で利用上の特性や維持管理への地元協力についても議論した上で、子どもから高齢者まで使いやすいよう、大便器はすべて洋式とし、多機能ブースには小さい便座や男の子用小便器を追加して子どもや子育て世代に配慮することを決めた。

また「公園の散策を誰もがしやすいようにしたい」との意見を反映させ、公園の各出入口から園内全体を段差のない園路で円滑に周遊できる設計とした。

(6) 地域防災力の向上

高蔵公園は名古屋市地域防災計画「一時避難場所」に位置付けられている。また、災害時の帰宅困難者が帰宅経路や支援箇所を確認できる徒歩帰宅支援マップの案内場所にもなっている。検討会においても防災機能の向上は議論となり、基本方針の1つに「災害時の活用に配慮する」を盛り込み、施設の検討を行った。

具体的な施設としては、防災パーゴラ（平常時：休憩所→災害時：防災活動用テント）（写真-10）やかまどベンチ（平常時：ベンチ→災害時：かまど）を地元や地域と連携し、災害時の運営主体を調整した上で設置した。また、大津通沿い出入口とトイレ付近の公園灯2灯を停電時でも一定時間点灯可能なバッテリー内蔵式公園灯とした。



写真-10 防災パーゴラ

5. 遺跡への関心と公園利用の広がり

(1) 高蔵遺跡の再認識

高蔵・旗屋学区では、近年マンション建設等により地域の歴史を知らない若い世代が多くなったという。弥生時代からの遺跡を生かした公園づくりを進める中、公園再整備をきっかけに行われた埋蔵文化財の発掘調査の状況を市民に見ていただくため、平成30年11月23日に文化財保護室主催で「高蔵遺跡第60次発掘調査現地説明会」を開催した（写真-11）。

当日は、様々な世代の約250名もの市民が集まり、発掘現場では、弥生時代の溝や埴輪等の土器、古墳の石室とみられる石積みの様子などが見られ、参加者は学芸員の解説に熱心に耳を傾けていた。参加者からは「高蔵公園にこんな遺跡があったなんて知らなかった」と驚きの声がり、また、11月26日付中日新聞朝刊に説明会の様子が取り上げられ、「こんなに近くで見られることに感動した」という児童の声が掲載された。



写真-11 5号墳での説明

(2) 日常の公園利用の増大

再整備前の公園は、遊具が樹木の生い茂った樹林地の中にあったことや公園内での見通しがきかなかったことから、児童球戯場以外での子ども達の利用はあまり多くなかった。しかし再整備後は、平日の午前中に小さい子どもを連れた親子や近くの保育園、夕方には学校が終わった子ども達で賑わう公園になった。広場のトラック園路では子ども達が笑顔で駆け回り、運動会さながらの様子である。また、検討会で意見を出し合った「わんぱく子ども広場」の斜面遊具(写真-12)は順番待ちができるほど人気の施設になった。のんびり散歩を楽しむ人も多くなり、日常の公園利用が期待以上に増えている。



写真-12 遊具で遊ぶ子ども達

(3) 地域交流の活発化

公園での地域交流は、夏の盆踊り等の季節の行事のみで、年間を通じたものはなかった。しかしながら、検討会を通じて公園愛護会設立の機運が高まり、平成30年5月より高蔵町内会を中心に愛護会が結成され活動を始めた。毎月第一日曜日に20~30名が集まり定期的な清掃活

動や花壇づくり(秋から春は小学生によるチューリップ花壇づくり)が行われ、公園に彩りを添えている。愛護会活動には親子での参加もあり、高蔵町内会長(兼公園愛護会長)から「これまであまり高蔵公園に興味を示していなかった若い世代や子ども達の参加が増えて公園が賑やかになった。良くなったね。」と褒めていただいた。

このほか地域の歴史愛好家から「高蔵の歴史を公園で感じてもらえる。小学校から声がかかれば、ぜひ課外学習等で子ども達にも伝えていきたい。」という前向きな言葉をいただくなど、再整備の計画目標「みんなを結び楽しめる公園」に向けて地域主体の活動が芽生え、交流が活発になってきている。

6. まとめ

本稿では、4年間で進めた高蔵公園の再整備の経過を述べてきたが、そのほかに取り組みを通じた地域の方々との対話で多くの気づきを得ることができた。

事業開始当初の頃はいただいた多様な意見やアイデアに対して、公園再整備の方向性や具体案をうまく表現できず、経験不足を実感させられた。叱咤激励や公園整備の先輩方のアドバイスを受け、計画目標や基本方針に関する作成の検討を重ねるとともに、自ら地域に足を運び観察や対話を重ねた。次第に「住民が大切にしてきた公園樹木への思い」や「高蔵遺跡の価値と地域の誇り」「遊具だけでなく園地の特徴も楽しむ子どもたちの遊び」など高蔵公園ならではの魅力を加えるヒントを得た。大切なことは、歩みを止めず、思いをかたちにする方法を地域と共に考え続けることであると実感したと同時に、公園を通じた地域の活性化にはハード面の整備だけではなく、住民主体による活動を引き出す工夫が必要であることを知った。

市内に限らず、施設の老朽化や地域の環境変化などにより、再生が必要となっている身近な公園が増えている。この報告が今後の身近な公園づくりの参考になれば幸いである。

参考文献

- 1) 名古屋市教育委員会：名古屋の史跡と文化財(新訂版)，1991.
- 2) 鍵谷徳三郎：尾張熱田高倉貝塚調査，東京人類學會雑誌，第二百六十六號，1908.
- 3) 檜崎彰一：名古屋市熱田区高蔵第Ⅰ號墳の調査，名古屋大学文学部 研究論集Ⅺ 史学4，名古屋大学文学部，1955.